

第12部会

一層深い、自己の存在意義のレベルにまで根差す性質のものであった。

近代思想における児童文学の宗教性

大澤 千恵子

児童文学は、その源流にフランスの *Contes de fées*・ドイツの *Märchen* などを含んでいるが、それらは「文学的おとぎ話」*literary fairy tale* であり、それ以前の口承の物語を発生源としながらも近代以降再構成された物語の形式である。その成立は、ルイ一四世の治世末期のフランスで、シャルル・ペローの物語集 *Contes* がその草分け的存在である。ペローは、宮廷の権力の中核にいたエリートはあったが、新興勢力としてのブルジョワジーであった。ブルジョワジーは、宮廷文化と民衆文化との接合をはたして近代文明を成立させたといわれるが、ペローによる「文学的おとぎ話」もその特徴が色濃く表れている。

その特徴として、以下の三つのものに対する憧憬が挙げられる。まず、一点目は、「過去」に対する憧憬である。原題の「過ぎ去りし時代の物語」からもわかるように実際には、非常に当世風の、ルイ一四世の宮廷生活を彷彿とさせるような場面を取り入れていたのだが、過去の物語として遠隔化されたのである。「むかし、むかし、あるところに……」という今ではお馴染みの冒頭のフレーズは、一瞬にして聞き手を現実時空から

引き離す役割を持っているが、これはペローによって様式化されたといえる。

二点目は、「民衆」に対する憧憬である。前者に先駆けて手稿本として出された「鶯鳥おぼさんの話」の扉絵には、農民風の年配女性が数人の上流階級の若者や子どもたちにお話を聞かせている様子が描き出されていた。これは、自然な生活の象徴である農民、素朴な民衆に語り継がれたものという、今日における昔話・民話の一つの類型的なイメージである。同じくこれもペローの知性によって機知に富み、洗練化された物語となっていたにも関わらず、確立されたものだ。

三点目は、「子ども」に対する憧憬である。ペローはこれらの物語自体を「素朴な、子どもの物語」と呼び、物語の聞き手、あるいは教訓の享受者として「子ども」を意識していた。ペローは近代思想における子ども観の素地をつくった先駆けなのである。

以上のように、ブルジョワジーの文化・芸術・教育に対する高い関心と読み書き能力によって洗練化され、普及した「文学的おとぎ話」は、「過去」「民衆」「子ども」への憧憬をその根底に内在させながら、独特の物語のプロットやテーマやモチーフを構築し発展させたのである。遠い過去、素朴な民衆、あるいは子ども時代への憧憬は、近代人が喪失してしまったと感じている自然状態への回帰願望である。だがそれは、失われた自然そのものがもっているものに要因があるというわけではない。むしろそれらを他者として差異化し、遠隔化し、それを再統合しようとした近代人の心性の中にこそより鮮明にイメージ

化されて生じたものなのである。

元々は一つであったものの一方を他者として外側に押し出す作業は、現実の二重化である。「文学のおとぎ話」は、乖離した現在と過去、自然と文明、大人と子どもを接合し、二重構造を保ったまま一元化した世界を再構築したのである。そのため、「文学のおとぎ話」は、社会にたいする倫理的・政治的批判を提起したり、社会・宗教的な代償となったりするような世俗宗教的機能を持ったのである。実は、そうした機能自体は、中世以前の妖精信仰が担っていた宗教的な機能にはかならない。「文学のおとぎ話」には、物語の主要な登場人物としてしばしば妖精が登場するが、妖精たちが物語化される以前の、妖精の存在それ自体が持っていた宗教性は失われてしまっているといえる。しかしながら、中世以前の妖精信仰もっていた宗教的機能そのものは、「文学のおとぎ話」という物語の形式全体の中で保たれているといえることができる。

ブルターニュにおける図像と宗教性

—— 現代的展開事例から ——

中 島 和 歌 子

現代ブルターニュでは、フランスの他地域と異なる民族的・言語的な起源をケルトに有する象徴として、古代から中世にかけてケルト文化圏で装飾等に使用されたトリスケル (Treskel) と呼ばれる螺旋状図像が、観光をはじめとする文化的シ

ーンにおいて広く普及している。トリスケルは三つ巴様の形状をとる三つの渦巻からなり、各渦巻が「生・死・再生」に対応しているとの解釈が一般的である。美術史学においては、福音書写本などの使用例から、古代ケルト人の死生観や輪廻思想との関連可能性が指摘されてきた。

しかしながら、ブルターニュにおけるトリスケル受容は、二十世紀初頭にブルターニュ民族党 (Parti National Breton) の指導者 O・モルドレル (Olier Mordrel) が、「ケルト的な古い不思議なシンボルの中から党の徽章を選択する」方針を採ったことに始点をもつ。他のケルト文化圏と異なり、ブルターニュではトリスケルをあしらった出土品や文化財は見当たらず、今日ブルターニュで我々が目にするトリスケルは所謂「創られた伝統」に類するものと考えられる。なお、ブルターニュ民族党には、古代ケルト宗教の復興という文脈は存在しなかったが、古代の宗教的素材と推測されるトリスケルを再構成した表象を恃む戦略は、同時代ドイツの民族主義 (フェルキッシュ) 宗教運動と類似の発想であり、ここに多少の新異教主義的意識を確認することが可能である。

とはいえ、二十世紀初頭のブルターニュで異教性を強く追求する動きも皆無ではなく、ネオ・ドルイディズムの集団クレードン・ゲルティエック (Kredenn Geltiek ケルト信仰) は、ケルト神学や儀礼の確立、制定等を活動の目的としており、設立時の声明では反キリスト教の立場を明確に表明するなど、ペイガニズム的性質は非常に濃厚であった。なお、現代のドルイディズム集団のうち、クレードン・ゲルティエックの系統に属